

所属校	文京区立関口台町小学校	氏名	矢部 明美
所属大学院	上越教育大学 大学院	専攻・コース	学校教育専攻科 教科領域教育専攻 生活・健康系（保健体育）
研究テーマ	運動遊びにおける身体感覚の覚醒と学習指導に関する研究		
<p>1. 研究の目的</p> <p>現代の子どもたちの遊び環境や、ライフスタイルの変化は、子どもたちが「遊び」に身を置き、その中に浸りきって過ごすことを難しくしている。その結果、以前は遊びにおいて当たり前のように味わえ、多種・多様に拓かれていた感覚が、十分には味わえず、拓かれずにいるという事態を引き起こしている。</p> <p>また、体育の『基本の運動』においては、名称を「〇〇の運動遊び」と変更し、より取り組み易い未組織・未分化で原初的な内容とした。しかし実際には運動の技術や構造を易しくしただけの、動きを手段としての「遊び」に組み込んだ授業展開を見ることも珍しくはない。</p> <p>小学校低学年という、多くの運動への扉を開ける時期において、動きが形としてできるかできないか、ということの問題にする前に、そのもととなる子どもたちの身体感覚に着目していくことは、これからの体育学習を考えていく上で、避けては通れない問題ではないだろうか。</p> <p>子どもたちの中で、＜今＞どのように＜感じ＞が起こり、動きとなって現れてくるのだろうかということに眼を向けていきたいと考えた。</p> <p>そこで、本研究では、運動遊びにおける子どもたちの動きの事実から、その発生と行為においてどのように身体感覚が起こっているのかを分析・考察し、運動遊びの学習指導を改善するための基礎的知見を得ることを目的とした。</p> <p>2. 研究の内容</p> <p>(1) 文献・先行研究の整理</p> <p>① 諸領域における身体と感覚のとらえ方についての概念整理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 自然科学的に見た身体と感覚 ・ 運動学的に見た身体と感覚 ・ 現象学的に見た身体と感覚 <p>※結果として運動学や現象学のそれに多くの示唆を得ることができた。</p> <p>② 子どもは動きの中で、言語によって分節する前の＜感じ＞を心でなく体でなく＜身体＞としてもっている存在であると考えた。したがって身体感覚を感覚器と結びつけてとらえたり、現れた動きの形態から一定の知覚を特定したり感覚名を付与したりすることで子どもの身体感覚には近づけないという考えに至った。そこで実際に＜いま・ここ＞で感じている＜感じ＞を、筆者自身の中に取り込みとらえていくこととした。</p> <p>(2) 動きの観察及び考察</p> <p>運動遊びにおける子どもの動きを観察し、現れた動きを分類・整理し、その一つ一つについて考察を加えていった。観察対象は以下のとおりである。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 東京都 S 小学校 1 年生 39 名 ・ 『平均台遊び』 			

(3) 研究の実際

直接観察からの記述及び VTR 撮影の資料により、見られた動きを<上がる><進む><お
りる>にわけ、現れた動きの発生の類似性の視点から分類整理した。そこで起こっている身
体感覚については自信の経験を投射しつつ、類推的に考察を行った

その結果、身体感覚の覚醒のありようは、次のようにとらえられた。

運動遊びにおいて、子どもたちは「はらはら」「どきどき」する(感じ)を求めて活動を繰り返
していた。また、現れた動きは繰り返しのように見えても、一度として同じではなく、その一
回一回において自分の身体と様々なやり取りをしながら動きの新しい<感じ>を紡いでいる
ことがわかった。

子どもたちは「はらはら」「どきどき」した<感じ>と、繰り返すことで起こる「滑らか」
で「のびのび」となっていくことの間で、行きつ戻りつしながらそこで起こる動きの<感じ>
を経験する。

うしたあり様を、「身体感覚が覚醒していく過程」と呼ぶことができるのではないかと考える
る。

そして、この「身体感覚が覚醒していく過程」については、いつも易しい動きから始める
のではなく、少し難しいと思われる動きにも挑戦できるような、できるだけ大きなふり幅一遊
隙一のある場で動くことが、より子どもたちと身体との動く<感じ>に対するやり取りを濃密
にしく身体感覚を、より鮮明に実感することにつながっていくと考える。言い換えれば、
自分の身体を異化した状態に置くこと、あるいは日常の身体を越える動きに、身体感覚を覚
醒させる契機があるといってもよいであろう。

3. 研究成果と課題

身体感覚に着目した運動遊びへの問題提起

①運動の楽しさのとらえ方

運動の楽しさとは、「いかに体を思い通りに動かすことができるか」というような、自分
から「体に働きかける」ことで生まれる楽しさと、今回の平均台遊びのように、「働きかけ
られる」ことで生まれる楽しさの二つの側面をもっていると考えられる。低学年の子どもたち
にとっては、「働きかけられる」ことで生まれる楽しさに着目した運動遊びを考えていくこと
は重要であると考えられる。ここでの楽しさは、実際に子どもたちが身体で感じている感覚のよ
うなものである。

「働きかけられる」ことで、子どもはその世界に浸りこんで楽しむことができる。これは
子どもを受身にしているのではなく、身体での実感を伴いながらの経験として根付き、「も
っとこんなことをしてみたい」という自発性の根を育てることになる。この部分がしっかり
掘り起こされていることで、その先の運動にも自発的に「働きかける」ことができるよう
になる。

②現れた動きへの教師の働きかけ

子どもの動きは外から見た形態が似ていても、子どもの中に起こる動きの<感じ>につい
ては、ぼんやりと意識しているのかはっきりと意識しているのか、あるいはまた、どのよう
なかんじであるのか、一人一人によって違う。現れる動きとは、動く<感じ>を伴っている、
あるいはそのものであると考えた時、子どもの動きを見ている教師自身が、実際にその運動
の経験を、感じを含めて自分の中に呼び起し、子どもの中に「住み込む」ようにして子ども
にその感覚を呼び覚ますようにしてやる必要がある。

所属校	文京区立関口台町小学校	氏名	矢部 明美
派遣大学院	上越教育大学 大学院	専攻・コース	学校教育研究科 教科領域教育専攻 生活・健康系(保健体育)
研究テーマ	運動遊びにおける身体感覚の覚醒と学習指導に関する研究		

1 所属校での成果活用	<p>(1) 研究の結果から</p> <p><研究方法－経験類推的な考察方法の活用></p> <p>本研究においては、子どもの運動観察に基づき、その事実から考察を行った。事実を詳細にとらえ、自身の経験を投射していくこの方法は、運動観察だけでなく、他教科・他領域においても、子どものもつ様々な可能性に気づき、内面に迫ることができる方法である。</p> <p>本校の今年度の研究テーマ「伝え合うカーコミュニケーション能力をはぐくむ」においては、人とのかかわりについて、より分析的に事実在即して観察を行うことができた。</p> <p>また、子どもたちが常に、授業の中で紡いでいる<かかわり>や<関係性>の中での<学び>について、言語を通してだけでなく言葉にならないものが言語によるかかわりをより有機的なものに行っていることが実践を通してわかった。</p> <p>それが一人一人の子どもたちの<学び>の姿として立ち現れてくるということ、体育だけでなく、国語や特別活動の授業場面の VTR などをもちいて実際に分析することで、本校が目指している「授業改善」において、子どもたちの内面に迫ることができた。</p>
2 委員会・研修会での成果活用	<p><低学年の運動遊びへの提案></p> <p>○ 1 1月に行われた区の体育部会において、今回の結果を踏まえ、低学年児童にとって「遊び」と「身体感覚」の関連を明らかにし、そこに着目した運動遊び『鬼遊び』(1年生)の提案を行った。</p> <p>教師が実技研を行った VTR から、現れた動きを分析し、心持ちを含んだ<動き>としての考察を行った。そしてそこで現れた動きに伴う感覚を抽出し、授業場面に有効な場やルールを検討し、研究授業を行った。</p> <p>自身の研究の根幹である「身体感覚」について、実践を通して検証していくことができた。そして、「言葉にはならないが伝わるもの」「目に見えないものを見通すこと」の重要性を改めて実感した。そしてそれは実際にあることを、つぶさに見る作業を繰り返すことで、自分自身の感性としてみがかれ、自分の中に備わっていくということがわかった。</p> <p>○ 自身が所属している体育研究会(東京都)において、2月に実践を踏まえた発表を行い、研修成果として広めていく予定である。</p>

<p>3 成 果 を 生 か し た 研 究 授 業 等</p>	<p>現在担任している学級において、子どもの身体感覚に着目した授業を行った。</p> <p>『跳び箱運動』（5年生）</p> <p><授業の概要></p> <p>①「遊び」であるということ</p> <p>運動遊びの中で、<遊ぶ>ということを保証することにより、子どもたちの中の「できるか」「できないか」といったはらはらどきどきした気持ちと現れてくる動きが一体となって起こることが、より多く生み出される。そして「真似る」という、一つの対他的な行為によって、真似ようとする当の本人が自分の中に感じ取るのである。そして、自分にはなかった<感じ>を真似ることによって共有し、<感じ>をより広げていくことができる。</p> <p>実際の授業場面においては、既習の内容の技調べをすることではなく、自分がやってみたい段で、今できる動きを十分に行える時間を確保した。飽くことのない繰り返しの中で、子どもたちは「高さだけじゃなくて、今度は跳び終わったあとだれが止まれる（着地）か。」など、様々な「遊び」として、動きのポイントを抑えていくことができた。</p> <p>②大きなくぶり幅>のある場の設定</p> <p>子どもは遊ぶ場合において、よくできるようになるために遊んでいるのではなく、はらはらどきどきした感じの間を遊んでいるのである。子どもたちの身体感覚を呼び覚ますためには、易しい場で「ほどよく」できる経験だけでなく、自分の身体の限界を試されるような場で動く経験までを包括できる場の設定が必要であると考えます。</p> <p>実際の授業場面では、6段の跳び箱の上に、一人が馬を作りそれを跳び越すという場、また、横跳び越しを大きく行わせる場を設定することで、子どもたちはこれまでもっていた動きの<感じ>を破り、新しい<はらはら><どきどき>した感じを味わった。そのことにより、運動をしている自分の身体を実感としてとらえることができ、行っている運動そのものを、自分自身の運動のメロディとしてとらえることができた。</p> <p>また、それらを記述して振り返り、自分の身体に感じた感覚を再び取り出すことにより自分の身体の<感じ>を自身の内面から、また客体としての自分の身体として両面からとらえることができた。</p>
<p>4. 今 後 の 活 用 計 画 等</p>	<p>① 子どもたちの動きの分析について、実践を通して研修を深め、そこで起こっている、<こと>としてとらえる見方を、他教科にも応用し、校内に広める。</p> <p>② 感覚統合の考え方をあわせ、ADHD の子どもたちに有効な手立てを講じる一助とする。</p>